
詐欺師の樂園

種村季弘



白水社

訳者略歴

一九三三年生

一九五七年東大文学部独文専攻

ドイツ文学専攻

主要著書

「吸血鬼幻想」

「バラケルスの世界」

「壺中天奇聞」

「山師カリオストロの大冒険」

「箱の中の見知らぬ国」

「書物漫遊記」

主要訳書

G・R・ホッケ「迷宮としての世界」(共訳)

ハンス・ヘーニ・ヤーン「十三の無気味な物語」

パウ・ル・シェーアバルト「小遊星物語」

R・ベルヌーリ「錬金術」

白水叢書

35

詐欺師の楽園

定価一五〇〇円

一九七九年三月二五日印刷
一九七九年四月七日発行

著者

◎

種

村

季

弘

発行者

中

森

季

雄

印刷者

山

岸

真

純

発行所

株式会社

白

水

社

東京都千代田区神田小川町三の二四

電話東京(四)七八一一(代)

振替 東京 九一三三二二八

郵便番号一〇一

三秀舎印刷・加瀬製本

(分) 1398 (製) 90350 (出) 6911

詐欺師の樂園

種村季弘



白水社

詐欺師の樂園 ■ 目次

はじめに——表層の人 9

I

賈エチオピア皇帝の訪れ 15

英国艦隊をコケにした悪漢ヴェア・コール

エチオピア皇帝一行の英国艦隊見学／提督ら「ブンガ・ブンガ！」とよろこぶ／名女優ヴァージニア・ウルフ／主謀コール稀代の悪巫山戯、死してなお人を欺く

バルムベツクの王様 27

大盗賊団長アドルフ・ペーターセン

スラム街バルムベツクの英雄／裏切られた純愛／猿（ましら）のごとき大盗賊団ペーターセン一家／もう一人のアドルフ・ヒトラー登場

ルーマニアの泥棒英雄 49

貴婦人総ナメのゲオルク・マノレスコ

カードの天才少年／ブローニュー伯爵夫人との恋／上流階級専門の宝石泥棒／大泥棒アメリカへ渡る／ルーマニアでの大歓迎／黄金の腕折れて

モナ・リザ泥棒

83

無頼の王様アポリネール

モナ・リザの失踪／アポリネール逮捕さる／ピカソは共犯か／第一次大戦の予行演習／真犯人はダヌンチオか／誰がこの次にモナ・リザを盗む

II

詐欺師の哲学

109

薔薇十字団大幹部カザノヴァ

女流錬金術師デュルフェ夫人／魔術師カザノヴァのカブ・エリ／薔薇十字団のいかかわしき大幹部／夫人は「哲学の子」を宿して生まれ変わる

華やかな鉄仮面

126

女装の剣士デオン・ド・ボーモン

純潔な少年剣士ロシア宮廷に女装潜入／王の機密局の女秘書／女装のフェンシング試合／ボーマルシェとの対決

大革命の時計師

159

国家陰謀の技師ボーマルシェ

時計職人から王室へ／ルイ十五世の秘密外交官／金儲けの天才／アメリカ独立戦争を演出する男／『フィガロの結婚』の成功と上演禁止／裏切られた革命の技師

夢の機械魔術師

史上最大の魔術師ロベール・ウーダン

カリオストロの謎の後継者／大魔術師トリニと遭う／機械狂・発明狂ウーダン／ロベール・ウーダン劇場／奇術よりは二月革命／映画はウーダン劇場から生まれた

III

悪魔博士の正体

オカルト怪人シュレンク・ノッティング

トーマス・マン霊媒実験にお熱／マンの『オカルト体験』／操られ浮揚するハンカチ／船酔いにかかった臨席者／アンチ・オカルトの文化人たち

二十世紀に蘇る救世主

奇蹟かベテンか ブルーノ・グレーニンゲ

呪われた赤ん坊／グレーニンゲの奇蹟に集まる病人たち／足萎えが立ち、癌は治る／好色絶倫の救世主／支持する会のスキャンダル／イエスは再来したか

顔のない男

詐術と煽動のスーパー・カメレオン

大英帝国下院議員、ハンガリー秘密情報局員、スバルタクス団幹部／中国大陸に暗躍／井上日召との出会い／ナチス支持のチベットのラマ僧／さまよえるユダヤ人

史上最大の贋金造り

.....245

ポルトガル乗っ取りのアルヴェス・レイス

葬儀屋の息子、人生へ出発／アンゴラの鉄道株の買い占め／獄中で通貨偽造／正式のニセ札印刷／銀行も国家も植民地もいただき

IV

詐欺師の楽園

.....265

トリックスターたちの肖像

はじめに——表層の人

ラインハルト・ルツプレヒトはミュンヘン保安警察長、ハンス・キンツルはミュンヘン刑事警察詐欺犯部門の専門家だが、この二人が共同して書いた「私はいかにして詐欺から身を守ったか？」というポケット版の本をかねがね私は愛読している。この本を購ったのは、たしかベルリンのダーレム美術館で、「贋作＋研究」^{フエルシュンク}という妙な語呂合わせめいた大贋作美術展のカatalogを手に入れて、ほくほくしていた日の帰るさであつたと憶えている。その日の私は、国家機関が大がかりな贋作展を主催して、精緻な研究業績を上げている酒脱さにちよつと脱帽しかけていたが、敵もさるもの、ちゃんと予防策のほうもベストセラーでばら撒いて、マッチポンプ式に、プラス・マイナス・ゼロの答を出している。すべて世は事もなしである。

さて、そのポケット本によるならば、西ドイツの年間詐欺事件は約二十万件、被害総額は十億マルク。一九七五年の統計だから、現在はこのをはるかに上回るだろう。統計表を読むだけでも風俗の細部が浮び上がつてきて興味津々だが、詐欺師の性格分析を見ると、この方は古典的な詐欺師研究のそれ（たとえばトーマス・マンの『詐欺師フェーリクス・クルル』のための創作覚書）と大して変らない。修辞学と同様、詐欺

師の手口は、古来あんまり変りばえがしないのである。新手の手口と見えるのは、風俗的背景や小道具が時代によって多少変るので、ファッションが変化するためにすぎない。裏を搔くという詐欺の基本原理は、いかなる時代がやつてこようと微動だもしないのである。参考までに、ラインハルト・ルツプレヒト／ハンス・キンツルが太字で強調している詐欺師の主要な性格分析を列記しておこう。

「詐欺はインテリ犯罪である」

「詐欺師は変装技術に長けている」（「詐欺師は多くの顔を持っている」）

「詐欺師は大概豪勢な暮しをしている」

「経済犯罪は社会的に適法であるように見える」

窃盗や強盗と違つて、詐欺はシステムを逆手に取る犯罪技術であるから、インテリでなければできない、ホワイトカラー犯罪なのである。サギられる側の性格もこれを裏づけている。年齢的に詐欺の被害が多発するのは、男なら五〇代から六〇年代にかけてが圧倒的な数に上る。未成熟のために詐欺に掛るのではないのである。豈計らんや世の仕来りをきちんと身に着け、このシステムについての知識経験を生かして、あわよくば一発当てようと勃々たる野心を秘めている連中が、いちばんのカモなのだ。カモはシステムの操作にかなりの自信を持っている。年来の経験の賜である。さもありなん。ただ惜しむらくは、彼はシステムの内部で、市民階級の諸条件を手放さずに一攫千金を企む。そこが詐欺師のツケ目だ。こちらは市民階級の外部から、市民そっくりの他所者としてやってきて、脂ぎった市民諸君の欲望をシステム通り、但し外部から操作して、造作なく逆手に取ってしまう。

女性のカモが四〇代まででほぼ止まっているという統計の意味は、ちょっと複雑だ。彼女たちの大多数はシステムを知らない。本来ならシステム逆用の詐欺師の手口にはもっとも引掛りにくい手合いである。それで

いてとりわけ恋愛詐欺や結婚詐欺となると、面白いほどコロコロと引掛るのはいかなるわけか。詐欺師はおそらく女性にたいしては懇切丁寧な教育者として立ち現われ、はじめはシステムの手ほどきをしながら彼女たちを教化善導するはずである。甘言を弄し、システムティックな夢想（たとえばスイートホーム）を何度も耳元に囁きかけ、あまつさえ彼女たちがそれまで未知であつた性感帯の微妙な構造を手取り足取り教育してやったりする。こうして彼女たちが自然や家政の構造に開眼し、モットモットとせがみはじめる汐時を狙つて、われらが主人公はさておもむろに最後の仕上げに掛るであらう。

過程は教化善導であつて、いささかも後ろ指をさされるいわれはない。ただ最後の仕上げだけが平均よりいささか早く、唐突に、かつ明快露骨にやってくる。これが緩慢かつ猫かぶりであれば、月並な結婚生活にすぎなくなる。質よりはむしろ量の差である。胸に手を当てて考えても見給え。読者諸君の美しき奥方たちもまた、畜生、アタシは結婚詐欺に引掛つたんだわ、と潜在・顕在的にハッと気がつくか、あからさまにいきまくことが、これまでになかつたとすれば、これからはきつとあるだろうと私は確信している。

徒し事はさて措くとして、かように詐欺はシステムの裏を掻く技術であるので、ぜひともシステムという前提が存在していなければならぬ。貨幣制度や家族制度、身分制度や美術という制度がもしもの世になかつたならば、金融詐欺も贋金造りも、結婚詐欺も贋作も、発生しようがないからだ。ちやうど修辞学や論理学がなければ詭弁も嘘言も成立しないのと同様である。

システムがなければ存在しないという点では、詐欺師は彼のカモになる市民と同様である。但し、彼だけは余人とは異り、システムに保護されてシステムの内部にいるのではなくて、さもまことしやかにシステムのなかにいるふりをしながらシステムにたいして他所者としてやってくる。ちやうどフランスの構造哲学者が日本にやってきて、この国を「表徴の帝国」として見たように、である。とはいえ、ロラン・バルトが碧

眼紅毛の毛唐として当然持っていた特権を持たない詐欺師は、より普遍的な異人として存在そのものを、意味されるものの皆無である「表徴の帝国」として記号化し、世界を「詐欺師の樂園」という劇場に変容せしめなければならぬのである。彼は存在を表層化し、ついには表層しかない世界を作り上げて、その上で市松模様の盤上遊戯に打ち興じる。

つまり、(究極の)詐欺師こそは記号論体系そのものと化しておのれの現実的有効性をことごとく剝奪された見かけ倒し、身振りと言語の純粹陰画なのだから、ここに照明を当てることによって世界像がにぎやかな陽画として浮び上がってくるはずである。

私はそういうものとしての世界祝祭図を描こうとして、この本を書きはじめたような気がする。本書の原型は主として『奇想天外』(一九七四年二月―九月)と『流動』(一九七四年十二月―一九七五年五月)の二誌に連載したものだ。が、連載中私はたえず旧著『ナンセンス詩人の肖像』を念頭に置いていた。『ナンセンス詩人の肖像』が言語的ニヒリズムの考察なら、本書は能動的ニヒリズムの現象学であり、前者が言語の原陰画に関わるものなら、後者は身振りの陰画制作を心掛けたものだと言える。しかしまあそんな手前味噌のゴタクは、さっさと素通りして、読者はよろしく、この無数の顔を持ちながら顔のない男たちの肖像室に入って心おきなく笑い転げていただきたい。作者としてはそれが本望である、

再刊するのの際して、初出単行本(一九七五年、学芸書林刊)当時の編集作業を煩わした桑原茂夫氏に改めて感謝したい。今回の編集に際しては、白水社の森田哲康氏のお世話になった。厚く御礼申し上げる。

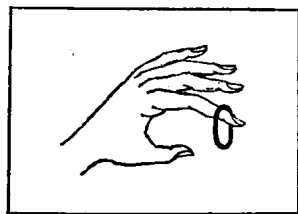
一九七九年三月七日記

著者



賈エチオピア皇帝の訪れ

英国艦隊をコケにした悪漢ヴェア・コール



一九一〇年二月七日午前十時三十分、ウエイマス湾で演習中の英国艦隊の旗艦H・M・S戦艦に一通の電信電報が届いた。宛名は連合艦隊司令長官サー・ウィリアム・メイ提督、送信者は外務次官サー・チャールズ・ハーディングである。メイ提督は折から大型戦艦をウエイマス港の艦隊司令部に使っていた。電文の内容は次の通りであった。

「ウエイマス湾連合艦隊司令長官殿。

アビシニア皇帝ナラビニ皇太子一行、キョウウ到着。一九一〇年二月七日月曜ロンドン発ポートランド午後二時十七分着特別列車ニテ艦隊見学予定。歓迎応対ハ国賓待遇ニテオコナウベシ。当方代表ハーバート・チョオモンドレイ。

ハーディング」